

「経営者は崇高な使命感を持って生きよう！」などと言えば、何を大袈裟なことをと一蹴されかねない時代が今です。

使命感とは、自分に与えられた重要な任務や仕事の尊さを自覚して、それを楽しむような心境です。実はこのような使命感を持つて事に当たるとは、決して大袈裟なことではありません。使命感を持って働くか否かは、自分自身の生きがいや仕事の成果に大きく影響しているからです。

「使命」というのは、その本質において必ず対象なり相手があるもので、そこには「人世のため」という働きがあります。したがって、使命感に燃えた働きは他人から喜ばれ、それが自分自身にとっても大きな喜びとなって返ってくるようになります。

そうした心で働いた時に思わぬ好結果が生まれ、さらにそれが大きな励みとなって、与えられている役割を果たすことができます。ますます楽しくなっていくものなのです。

しかし世の経営者の多くは、自社の利益を上げることだけに腐心しています。時にその努力はそれなりの成果をもたらしますが、それは正しい経営の原理原則を無視した、きわめて近視眼的な経営と言わざるを得ません。真に企業体質を強固にし、土台から繁栄企業をつくるには至らないのです。

今日の経営者たちを見る時、厳しい経営環境に押しつぶされそうになって苦しみ、喘いでいる経営者と、苦しみながらも将来をしっかり見据えている経営者とがいます。

この両者の大きな違いは、経営者自身が、自らの経営に対して揺るぎない信念と経営



揺るぎない使命感が 経営の信念を高める

え・牧えみこ

者としての使命感を持って毎日の仕事に取り組んでいるか否かにあります。

改めて経営者の使命は何であるかと考えてみると、(一)社員やその家族の生活を守る、(二)仕入先などと良好な関係を堅持する、(三)顧客の満足度を高める、(四)社会・文化の発展に貢献する、(五)自然や国家の安泰に寄与する、などがあげられます。

経営者がこうした使命を自覚して、使命感に燃えて働いたとき、自ずと次のような状況が生まれてきます。

- a 経営者も社員も、自分の仕事の尊さが分かり、経営に筋金が入る。
- b 将来に向けての目標や希望が湧いてくる。
(生命力が漲ってくる)
- c 世のため人のために働くことで、真の働きの喜びを感じることが出来る。

こうした高い使命感を持てるようになるには、どのような実践が求められるでしょう。

第一は、親祖先からの恵み、職親、社員・仕入先・顧客などから受けている幾多のご恩、そして社会から頂いている無数の恩恵に感謝し、報恩の実践に努める。

第二は、企業の存続・繁栄・永続に対する不退転の決意と強い責任感を持ち続ける。

第三は、親を大切にし、喜ばせ、そして親に対して素直になる。

経営者なら誰もが認識していることですが、わが国は今、経済的にも社会的にも極めて危機的な状況にあります。「日本創生」の実現には、経営者をはじめ国民一人ひとりが自らの使命を強く自覚し、足下の実践に真摯に取り組む以外に道はありません。